

里山における自然学習のための子ども向けプログラム・しおりの制作

○伊藤亜美 [東京農業大学] △栗田和弥 [東京農業大学]

キーワード：里山、みちのく公園自然共生園、自然学習、しおり、プログラム

里山はその地域の特性と、人の手が程良く加わることによって維持された生産活動の場となっているが、同時に次世代を担う子どもの遊びや昔から伝わる文化を継承する場としての役割も担っていると考えられる。そこで、子どもが里山の自然環境にふれあうためのプログラム作り、ならびにガイドブック（しおり）の制作を目的とした。具体的には、福島県相馬市の小学生を対象にした「みちのく夏の冒険エコキャンプ」（主催：都市緑化機構）にリーダーとしても2回のキャンプに参加した。第1回目は2011（平成23）年8月9～11日、第2回目は同17～19日にかけて実施された。プログラムは「ミッション・ポッシブル in satoyama」とし、国営みちのく杜の湖畔公園（宮城県川崎町ほか）内にあって里地・里山をテーマとして保全・整備されている「みちのく公園自然共生園」で行った。内容は、子どもが班ごとに協力しながら、里山を散策しながら問題（ミッション）を解いていくものである。しおりには記述箇所を多くつくり、植物や身の回りの生き物にどのような関心を抱いているのかを把握した。

千葉県花見川における音環境の調査・分析

○石崎 遥 [東京農業大学] △栗田和弥 [東京農業大学]

キーワード：音環境、サウンドスケープ、風景、河川流域、緑道

日常生活においては、様々な「音」を聞き取ることができる。自然の音から、都市におけるざわめきをはじめとする人工的な音、さらには記憶やイメージの中の音まで、それらは「音環境」あるいは「サウンドスケープ」として捉えることができる（岩宮：2007、ほか）。中でも、水のせせらぎや虫の鳴き声は癒やしや安らぎを享受することができる場合もあり、公園緑地などにおいて適用し計画において配慮すべき一要素であるということが考えられる。そこで本研究では、千葉市内を流れる花見川を事例として音環境の調査・分析を通じ、環境別にみた音の種類等の違いを明らかにすることを目的とする。

花見川は印旛放水路とも呼ばれる、上流域の印旛沼の排水を目的として開削された全長約19kmの河川である。その流域には背後に工業団地も見られるが、千葉市は流域沿いに緑地の回廊として位置づけ、花見川区を貫く形で緑道が形成されている。流域ではクヌギ・コナラの雑木林、竹林、ヨシ群落等の植生の多様であり、また千葉市内でも有数の野鳥の生息地として保全され、音環境の多様性がある。